

再発見 instinctive

1960年代から1970年代にかけてラグビーは現代化という大波を発震し伝波しグローバリズムの元にコーチングを先行させ flair and power をキーファクターに著しく進化を遂げました。instinctive and interesting なラグビーをめざしてそのために simple でありことを必須条件として改革を遂げてきました。

instinctive であるということは、足によるキックだけでなく、全身を使い自由に動き回れるスポーツで、人間背豊かに思い存分自分をパフォーマンス出来るということです。instinctive に勝敗を争うための人間の智恵として equal condition, open play, safety という3つを絶対条件とし、それらを守れば、ラグビーを本能的に楽しめるということを原理としました。

Laws の中で本能的であることを否定するのは '10m Law' (現行第11条4項、5項) ただ1つと宣言し、自由奔放に戦う一方において自己をコントロールすることを教えています。キックを受けようとする相手が目の前にいると、自分がオフサイドであることを忘れてタックルに立ち向ってしまうことを前もって防ぐものです。無防備のキャッチャーへのタックルは危険です。近年のルール改訂でキックオフやラインアウト等で跳び上ってボールをキャッチしようとしているプレーヤーにタックルすることは禁止されました。オープンプレーでもそうですが跳び上っているプレーヤーへのタックルは危険です。ラグビーは instinctive に戦うことを肯定すると同時に本能をコントロールすることを学ぶものです。身体がぶつかり合う状態でボクシングに似た殴り合いになることを抑制し危険なことを防ぐのが基本です。

instinctive にラグビーを楽しむ工夫がルールの改訂に見られます。競技を simple にすることによってプレーヤーは勿論のことレフリーも easy になり観客にとっても分かりやすくなります。そのために議論がなされ実験も進められています。simple に easier にするための最大の課題プレーはタックルされたらボール離すことです (現行 Law15 条参照)。このことの意識徹底が課題です。タックルされても所持しているボールを少しでも有利に展開したいという気持ちが immediately にボールを離すことを遅らせるのです。それが原因となってプレーが混乱し、停滞し、レフリーは判断に苦しむものです。

「ボールを持って走る、捕える、そしてボールを離す」という一連のプレーが競技の基盤である equal condition を保つのです。捕ってもボールを離さなければ equal condition にならないのです。それは勝つためという理由で許されることではありません。勝ちたいという気持ちが本能的にボールを離さないのです。捕ったらボールを離して equal condition から戦い続けることが認められている唯一の正しい方法です。

レフリーも常にボールの展開を回る信念を固めてプレーヤーに訴えかけねばなりません。ヘルドの反則を科しているだけでは無責任でよいゲームを創造出来ません。プレーヤーにとってもレフリーにとってもペナルティキックは免罪符ではありません。反則をしないことがラグビーを楽しむ基本です。反則をしないことがプレーヤーの責任であり、誇りとする事です。ペナルティキックが一つのゲームで 1~2 個となってゲームが継続されることが普通にならなくてはなりません。

2010.07.19
西川 義行